

花冷え寒波

+偏西風蛇行で七六年と類似+

「花冷え」という風流な響きも初めのうちだけで、度を越して「卯月寒波」と嫌われた春寒がやつと解消し初夏のような陽気となってきた。この寒さを演出した北極上空の寒気を日本列島に誘い込んだのが偏西風の大蛇行だ。さらに偏西風の流れから切り離された「寒さのもと」動きの遅い寒冷渦が次々と切り離され襲来した。

今年の春はとても寒いですね」と挨拶がわりに尋ねられるので、手元にあつた三十年ほど気象ファイルを調べたところが目にとまつた。

七六年の春寒は彼岸寒波から始まり四月上旬の東京の最高気温の平均は「九十二年ぶりの低さ」と報道された。直前の初冬寒波から師走の波状寒波に続いて「一月半ばには大陸では『三八豪雪』なみの豪雪に見舞われていた。はるかオホツク海の流水も例年になく遅く姿を現し、彼岸の後に北国の春吹雪・。

このように七六年の気象は今年よく似た経過をたどっている。

(日経 お茶の間天気図)
一九九六年四月二七日)

さらに七六年と今年の奇妙な類似点としては、約十二年の周期で変動する太陽黒点の

数の極少年にあたり、太陽磁石の変動する倍の約二十二年周期にもあたることもあげられる。七六年の場合、日本で大冷夏となつたがこの年を分水嶺のようにして世界的な気候の「ジャンプ」(階段変化)が発生。変動期間に入つた日本は以後十数年にわたつて東北地方で冷害が多発した。

当時、「一九三三年の大冷夏以来」という表現もあつたが、その一九三三年、作家宮澤賢治は、盛岡中学で多感な十七才の時を過ごしていた。この時期、大正凶作群という苛酷な冷害の原体験は、昭和凶作群とともに賢治の童話の傑作「グスクドリの伝記」に結実したとされる。「一九三三年も偶然にも黒点数の極少年であり倍周期でもあつた。自然では似たような繰り返しをすることが知られているが、今年は杞憂であつて欲しいものである。

朝日新聞：サシケイ新聞 晴墨雨
交通新聞『気象と交通』季節の散歩道、
そして日経の『お茶ま歳時記』『お茶の間
天気図』(一九八九年～一九九六年)まで
予報官から大學きょうかんなどで自由字
に書かせもらつた。少し整理してみまし
た。
